

捻子巻けど時を刻まぬ古時計わが身に累ね思ふも愛し

月冴えて影に身を置く羞しさよ一人とは絶対なる孤独

しみじみと累ぬる齡の愛しみよ雲間に懸かる白き夕月

ゆつたりと流るる雲よ冬空にはかなきものを追ふは徒勞に似む

それぞれに形成しつつ流れゆく雲の自在もはかなかるべし

郷愁はたまらざるまでに北を指す山茶花いかに赫く咲くとも

背負はれて見たるは遠き冬花火幼き記憶よ父の忌は明日

ガラス戸に張り付くカマキリと目を交はす愛しき朝冬に至りぬ

ひとひらの思ひもよらぬ訃報を掌にこの永訣にしばしの滄沓

消息の絶えたる人を偲ぶがに秋雨のこまやかにして皓し

辛うじて苗字とどめし表札のこの年月と共に老いたり

罫

『山茶花』

82-3  
号

行く年の鐘を聴きつつ爪を剪るわれにどれ程の未来ありやと

夕陽背に添れだち急ぐ鳥達よ罫はいづこ訪ねたきものを

ぼつねんと置き去りのごとまちつくし口空けて待つ円型ポスト

冬ながら頬に温かき風が来ていつもより近きポストまでの距離

ふる里の地形に似たる雲湧きてその郷愁はただならずして

雛壇

『山茶花』

82-4号

ぼんぼり  
雪洞の淡く灯れる雛壇にあがな購ひ足せし官女が竝ぶ

綻びのなき身とは云ひがたし省りみるときこころ糾さむ

音を断ち人をも避けて能りるる孤りも愉し雪来る気配

ひとりゐて孤独を謳はぬこの矛盾躍りながらの風のみが知る

かきくもる空わが意志までも攫ひゆき暗澹と今日ひと日暮れたり

水仙

『山茶花』

82-5号

諍はず競はずに来てひたすらに凛々しく木瓜に咲くゆゑ朱し

水仙の黄の極まり持てば不意にして傷きくるこの羨望は何

競ふがに黄を掲げて野にありし八重の水仙ひと重の水仙

何をもて言葉濁さむある日ふと長き孤りを問ひ詰められて

譲らざる持つ意志ゆゑの貧しさよ頑なまでの孤りと思ふ

手鏡

『山茶花』

82-6号

顔け合ひて喰む人もなき夜の卓に割りたる林檎の白き孤愁よ  
むらさきのほのかに差しすみれ草日射しの中に見えかくれして  
伏せられて闇を抱ける手鏡の陽にかざせば燦くものを

その夫を喪くせし友の哀しみに泪で綴りし文書き送る

まどまらず長き弔文書き終へてまなこ移せば既に葉ざくら

身を病む

『山茶花』

82-7号

朝よりハリハリと踏む霜柱かかる感動の抑へがたかり  
あした

体調の整はぬ日々の明け暮れよ底冷えの四月やがて畢りぬ  
身を病みて長き怠惰を宥しゆくこの貧しさ何もて補はむ

病むことも生きの証と諾へどあり余る身のこの存在は

病得て自ら蔑む身の憐れ今しばらくを癒えたかりしか

やまひ得てこころ衰ふ夕まぐれまこと冥きかな山鳩の啼く

夕ぐれのしじまを破り山鳩の鬱なる声よこの虚しさは

あぢさるの彩整ふまでは癒へたかり懇ろな禱りの中の夕映え

鬱鬱と重ねる日々に降る雨よ容赦なくして身の芯まで濡らし

紫陽花の彩づくまでは癒えたかり窓越しの庭のみどりが眩し



梅 雨

『山茶花』

82-9 号

黙しるるこの夕ぐれの<sup>め</sup>瞼に<sup>め</sup>冴へていよよ彩濃き雨のあぢさる  
梅雨ながら細々と降る雨の中わがもの貌の<sup>め</sup>梔子の皓

雨の夜の濡れて重たき<sup>め</sup>梔子のその芳香に<sup>か</sup>酔ひで睡らな  
はつ夏の甘き風喚ぶガラス窓透明なるも明日は見えぬ

わが詩は未だ成らずとも取り敢へず聴くは山鳩の声のうつろ

夾竹桃

『山茶花』

82-10  
号

灯を消して月射す居間に坐しながらこの平穩誰も侵せず

山百合の香は居間に充ちわたるともわが詩は未だにならずして

夾竹桃ま夏の空にはればれと朱く咲くゆゑ不意に妬まし

夾竹桃ま夏の空にはほの朱く乙女の頬の寄せ合ふやうに

荷を担ふ蟻のゆく先つきとめむ斯かる徒勞をひと生繰り返し

老いの身は誰に委ねむ庇はれて生きるしことも亦切なくて

つくづくと未だ生きるる身の愚かしさ明日を恃みて夕映えに佇つ

生れきて罪なき身とは言ひがたし譲れぬ感情の荷が重たし

こころ

ひそかにも言葉が欲しく歩み来てみどりの園のざはめきを聴く

辻棲の合はぬ会話に抗ひつ言葉にならず茶を啜るのみ

萩

『山茶花』

82-12  
号

萩の花わがかなしみの量ほどに零るる庭に巨き夕映え

わが裡を充たせる程にこぼれ咲く萩を巡りて別れて来たり

鬼薊ふれて疵つく傷みなれ敢へて選びしこの徑に来て

たかが爪されど爪なり切り揃へ蒼穹にかざさば晴ればれと秋

双耳もて聴きとりがたき哀しみよいつよりかわが抱く孤独感